

千葉大学 dri コミュニケーションデザイン研究室

桐谷佳恵 准教授



千葉大学デザイン・リサーチ・インスティテュート(dri)
コミュニケーションデザイン研究室 桐谷佳恵准教授

専門分野

- ・実験心理学
- ・コミュニケーションデザイン

キーワード

- ・視知覚
- ・対人認知
- ・コミュニケーション

TEL : 043-290-3096

E-mail : kiritani@faculty.chiba-u.jp

Website : <http://covid19wayfinding.jp>

(ワクチン接種案内システムについての情報)

■視知覚とデザイン

日頃わたし達は、感覚器官から情報を受け取り、違和感なく周囲の環境を認識しています。「なぜ、今見ているものは、そのように見えるのか？」と疑問に思うことはないでしょう。ですが、錯視やだまし絵のように、実際にそこにある存在と、わたしたちが認識したものの中にはズレが明らかになる場合があります。

そのような現象を、わたしは学生時代から研究しています。これは、ものの使いやすさや安全性とも関連し、デザイン分野とも密接に関連する事象です。人がどのように世界を見聞きしているのか、この基本的な行動を知ることは、デザイン実践においても大変重要です。

■案内のデザイン

2021 年度に、千葉大学デザイン・リサーチ・インスティテュート、通称 dri が発足しました。現在、わたしも dri のコミュニケーションデザイン研究室の一員です。最新の研究成果として、当研究室の張益準先生が中心として実践されたデザイン例をご紹介します(張・范・桐谷, 2021, デザイン学研究, 印刷中)。

それは、新型コロナウイルスワクチン接種会場内に設置された案内用のサインシステムです。通常、案内のサインには、目的地の方向を示す誘導の情報、位置についての情報、地図状の情報、禁止事項などを伝えるものがあるとされます。ワクチン接種会場においても、おおむねこれらの情報が必要にはなるのですが、一般的な案内のサインとは大きく異なる点が1つあります。

それは、ワクチン接種会場が、臨時に設置された会場であるという特徴と関係します。たとえば、商業施設などの案内では、仮に案内サインシステムが出来なくても、利用者は何度も利用するうちに慣れてしまい、システムの不備はそれほど問題にならないかもしれません。しかし、ワクチン接種会場は臨時設置会場なので、利用者の学習能力に頼ることができません。加えてこの場合、単純に場所を案内するだけ

でなく、ワクチン接種のプロセスを利用者に理解してもらう必要もあります。

紹介する墨田区モデルでは、色と数字を使って、ワクチン接種が何工程あり、それが会場内のどこなのかを案内しています。さらに、これらの情報は、利用者が手に取っていつでも確認できる紙媒体の案内、壁などに掲示される案内パネル、床にテープで示される経路案内、の3つで提供されています。ユーザテストの結果、いずれの案内サインも利用者の満足度は高いものとなりました。興味深かったのは、60代以上の利用者では、紙媒体の案内が、接種工程を理解するのに最も役立ったと答えたことです。一般に、掲示パネルが案内サインとして重視される傾向もあるようですが、本事例は利用者の実際の行動把握から、計画再考を適宜行う必要性も示しています。



■対人コミュニケーションのデザイン

人の移動に関する研究ではないのですが、現在、人と人をつなぐデザインの研究も行なっています。たとえば、初対面同士でも無理なくコミュニケーションが取れるゲームを学生さんと開発中で、これは、オンラインでのアイスブレイクにも活用が見込まれています。